

甲斐市立敷島中学校 学校関係者評価書（平成 27 年度後期）

平成 28 年 2 月 19 日（金）

甲斐市立敷島中学校 学校評議員・学校関係者評価委員会作成

平成27年度 第2回敷島中学校評議員・学校関係者評価委員会合同会議

実施日：平成 28 年 2 月 15 日（月） 午後 4 時 00 分～

会 場：敷島中学校校長室

参加者：（学校評議員 兼 学校関係者評価委員）

河西 壽人〔委員長〕 五味 和恵，小林 淳，市川 和美
（学校関係者評価委員）

五味 勝己（欠席）

（学校側） 海野 武仁〔校長〕，岸本 貴志〔教頭〕

I 学校側から提案された資料

- ・平成27年12月実施の教職員による自己評価，生徒アンケート，アンケートの分析結果及び課題点と改善策を示した「自己評価書」
- ・「創甲斐教育推進大綱」に示された学校教育の充実に関する平成31年度目標値に対する本年度前期及び昨年度の比較とその改善策
- ・自己評価シート集計結果表（前年度後期・本年度前期，甲斐市全体との比較）
- ・生徒アンケート集計結果表（前年度後期・本年度前期，甲斐市全体との比較）
- ・学校の概要及び生徒の現状について

II 協議された主な内容

学校側から提示された自己評価書及び生徒アンケートの結果に基づき，本校の教育活動や学校運営の状況の分析について，課題点が正しく把握されているか，改善策が適切であるか等について協議した。また，学校運営に関することや生徒の様子，今日的な教育課題等について意見交換を行った。

<学校関係者評価書>

I 全体評価

教職員による自己評価は，前期と同様に46項目すべてが肯定的評価（A評価またはB評価）であった。46項目中44項目が肯定率が9割以上で前期以上に高い肯定率となり，改善への努力がうかがえる。特に前期の課題であった学習指導に関しては教師一人一人の授業改善への取り組みを意識して行っている。しかしながら，生徒アンケートの結果をみると肯定的回答率が前期に比べ下がっているものが多々あり，教職員の自己評価結果と生徒アンケート結果のギャップが生じている。この原因を丁寧に分析し，生徒の実態に即した更なる改善を推し進めるとともに，今後も継続的な取組を期待したい。教職員がよく動いており，評価の裏付けとなっている。課題はあるが，その改善に向け，管理職のリーダーシップの下，全教職員が参画し，本年度のまとめをしっかり行ってほしい。

II 特 徴

- ・校長の経営方針，教育理念を全職員が共有し，学校運営全般でP D C Aサイクルを基調とした教育活動が行われている。
- ・学校運営については前期と同様に概ね良好である。教職員一人一人が主体的に学校運営に参画していこうとする意識が高まってきている。
- ・学級や学年の集団づくりを土台とし，生徒の実態に応じた授業を心がけている。
- ・基礎基本の習得，学習意欲の喚起，家庭学習の充実等，学習指導についての取組に力を入れている。
- ・「報告・連絡・相談・確認」を大切にし，組織的に教育活動が行われている。
- ・生徒アンケートの結果は前回（H27前期）に比べ，肯定的回答率が下がっている。
- ・家庭学習の充実や読書活動については課題がある。

III 今後の課題として意識されたいこと

- ・生徒アンケートの肯定的回答率が下がった原因を分析してほしい。
- ・生徒一人一人の学習状況をチェックする。成績が大きく下がった生徒など，変化が顕著な生徒には，多くの教師が関わることを通して違う見方で支援することも必要である。子どもから言ってこないこともあるので，教師側から積極的に声かけをしてほしい。
- ・読書の状況は厳しい。いろいろなチャンネルを伸ばす1つの方策は読書である。国語科や委員会まかせではよくない。管理職自らが指導していくことも考えてほしい。
- ・キャリア教育では，職業体験等は充実しているが，日常的に取り組む時間が少ないので，工夫していく必要がある。
- ・図書館機能の充実を図ってほしい。

※特記事項（意見交換の中で出されたもの）

- ・地域に対する子どもの自覚が低いように感じる。大人からのアドバイスなど，地域の方々との接点が少ない。地域で頑張っている人の講演会を設定するのもよい。
- ・自己肯定感を醸成するには，自分たちの良さや未来について，大人からのアドバイスが必要である。
- ・本が自由に読める環境にある子どもは学力が高いという全国の調査結果もある。中学校ではなかなかやらないが，「読み聞かせ」は効果的である。上手とか下手ではなく，知っている人が読んでくれるのが一番よい。子どものよい顔が見られる。
- ・スマホや携帯電話の普及で情報が溢れ，活字離れが進んでいる。子どもが新聞を読んでいない。新聞を購読していない家庭では親も読んでいない。活字離れにより，創造力が低下しているのではないか。そのことが夢や希望を持たない生徒の増加の要因になっていると思われる。
- ・子どもは可能性の塊である。可能性を伸ばしていくには場を与え，励ましてやるのが大切である。どの子も親にしてみればかけがえのない子どもである。学校は子どもが持っている力を発揮できる場である。理想に近づけるためにも目標を持たせることが大切だと考える。

記載責任者

甲斐市立敷島中学校 学校関係者評価委員会委員長 河西 寿人 ㊦